

令和 6 年 5 月 21 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00134

研究課題名（和文）プロティノスのアイステーシス論における像と痕跡の機能

研究課題名（英文）The Functions of Appearances and Traces in Plotinus' Theory of Aisthesis

研究代表者

関村 誠（Sekimura, Makoto）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・教授

研究者番号：20269583

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、プロティノス『エンネアデス』の感覚に関わる諸議論における印影や痕跡の位置づけとそれらが魂と肉体の関係において果たしている役割について考察し、感覚的把握とそれに触発された知的機能の諸局面における現れの受容や情動をめぐる議論展開の独自性を見極めることを目的とした。その上で、肉体と区別される非受動的魂がいかにして肉体に生を与えているのかという観点から、魂が自らの痕跡を肉体に送り出して魂と肉体の関係に寄与している機能の特殊性を明確化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

像を受容し創造する魂の受動的・能動的働きと、それらの働きを方向づけ、像とその源泉とのつながりを指示する痕跡の働きについてのプロティノスの議論を考察することで、人間の魂の機能において知性面と感性面の働きが連動していることを見極めて、その動態の側面に着目することから身体への関わりも含めて解釈を遂行することができた。それは、感性と知性とが区別されるものでありながら、知覚や認識において協働しているという人間精神の活動様態を究明する基盤ともなりうる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I examined the status of impressions and traces in the discussions of the senses in Plotinus' Enneads and the role they play in the relationship between the soul and the body. I tried to discern the uniqueness of the thought concerning the reception of appearances and affections in the various phases of sensory perceptions and intellectual functions. Then, to clarify the ways in which the impassive soul, which is distinguished from the body, gives life to the body, I examined the particularity of the functions by which the soul contributes to the soul-body relationship by sending out its own trace to the body.

研究分野：美学

キーワード：感覚 痕跡 刻印

1. 研究開始当初の背景

(1)美学を「感覚学」あるいは「感性論」として捉えなおそうとする動向の中で、美学の源流である古典ギリシアの思索における感覚の働き(アイステーシス)の位置づけを再考する試みは十分に遂行されているとはいえない。

(2)プラトン対話篇の独自の読解に依拠して哲学・美学を展開する新プラトン主義哲学者プロティノスにおける感覚の機能をめぐる思索は、当時の多様な思想状況の中で深められており、その研究はさらに遂行されていくべき豊かな内容を有している。プロティノスの諸論文についての詳細な註釈や研究書が近年多く刊行されてきており、それらを参照しつつテキスト読解を遂行することで、感覚的現れや痕跡の機能について考察を深め、プロティノスにおける魂と感覚の働きに関する議論の新たな解釈の提示を試みて、それを感性論の古典的展開の中に位置づけていくことが可能な状況となってきた。

(3)研究代表者は、プラトン美学における現れや模倣行為の問題を研究対象としてきたが、プラトンにおける感覚機能の問題については、平成21-23年度に科研費基盤研究(C)による研究を遂行し、プラトンの哲学構造へ組み入れられたアイステーシスの理論とイデア論の基盤とが相互に関連していることを示した。さらに、プラトンからプロティノスへの美をめぐる思索展開についての研究に着手し、平成24-26年度科研費基盤研究(C)により、プラトンからプロティノスへと展開されるアイステーシスの機能をとりわけ浄化概念の影響に着目して考察・検討し、また、平成27-29年度科研費基盤研究(C)により、プロティノス美学において、受動的な感覚と能動的な把握と関係に着目しつつ感覚機能の位置づけを遂行した。こうした研究をもとに、現れ、痕跡、印影などの機能と役割の解明という新たな探究アプローチにより、プロティノスの感覚をめぐる理論の考察が可能であると判断した。

2. 研究の目的

(1)プロティノス思想におけるアイステーシスの機能の解明を踏まえた上で、プロティノスの美学・感性論に関わる理論展開において、現れや痕跡や印影などの概念がいかに使用されているかを分析して位置づけ、これらに依拠して機能する魂の働きを明確化することを目的とした。

(2)プロティノスがプラトン思想をいかに解釈して引き継ぎ、あるいは当時の思想状況の中で、いかに独自の思索を繰り広げているかを明らかにして、感覚とそれに触発された知的機能や、現象の感覚的受容から感覚レベルを超えた存在を捉える知性的働きへの展開などを解明することを目的とした。その際、とりわけ印影や痕跡の機能に着目しながらテキスト分析を遂行し、プロティノス思想における感性と知性の協働の様態を究明することに努めた。

3. 研究の方法

(1)プロティノス『エンネアデス』の古典ギリシア語原典の分析・検討を基礎にして、近年多数公刊されている各論文の注釈書等を参考としつつ、プロティノスにおける哲学的営みに組み込まれている感覚(アイステーシス)の機能に関して、肉体的な情動に結びつく側面と、知性的働きに発展的に通じていく側面とを区別し、かつそれらの関係や連動を説いている箇所に着目し、とりわけ「像」「痕跡」「印影」などの果たす役割を把握することに努めた。第1論文「美について」において、肉体美が知性美の「像」「痕跡」「影」とされる議論の中で感性界と知性界の関わりが考察される文脈を分析・検討の対象とした。また、プロティノスのアイステーシスに対する捉え方が組み込まれた思索が展開されている第19論文「徳について」および第53論文「生命あるものとは何か、人間とは何か」において感覚し知覚する魂による「印影」の把握が知性対象の「観照」への基礎となっていることについての議論を、他の論文と比較しつつ考察した。そこから、アイステーシスの働きが感性レベルと知性レベルの緊密なつながりをもたらしていることを提示した。また、第27、28、29の一連の論文「魂の諸問題について」において、魂と肉体が「魂の痕跡」の概念が導入されることで関係付けられていることに着目し、プロティノスの魂と感覚の理論の特殊性を明確にすることを試みた。

(2)プロティノスのギリシア語原典テキストは、*Plotini Opera*, ediderunt P. Henry et H.-R. Schwyzer, Tom. I-III (1964, 1977, 1982), Oxford Classical Texts を用いた。邦訳は『プロティノス全集』(中央公論社、全4巻+別巻)を主に参照し、L.P. Gerson (ed.) の英訳(Cambridge)、A.H. Armstrong による英訳(Loeb Classical Library)、および E. Bréhier による仏訳(Les Belles Lettres)、L. Brisson を中心とする研究者による詳しい註付きの仏訳(GF-Flammarion)を用いた。プロティノスの第1論文については、Plotin, *Traité 1 (I-6)*, introduction, traduction, commentaires et notes par A.-L. Darras-Worms, Cerf, Paris; Plotin, *Œuvres complètes*, Introduction, *Traité 1 (I-6)*, *Sur le beau*, introduction, traduction et notes par M. Achard et J.-M. Narbonne, Les Belles Lettres, Paris などの充実した註釈を参考にした。第53論文については、詳細な注釈書、Plotin, *Traité 53 (I-1)*, Introduction, traduction, commentaires et notes par G. Auby, Paris, Cerf を参照する。第27、28、29論文については、*Ennead IV.3-4.29, Problems concerning the Soul*, Translation,

Introduction, Commentary by J.M.Dillon and H.J.Blumenthal, Parmenides, 2015 等を用いた。プロティノス哲学全般の文献は、D.J.O'Meara, *Plotinus: An introduction to the Enneads*, Clarendon Press, Oxford, 1993; J.M.Rist, *Plotinus, The Road to Reality*, 1967; *Cambridge Companion to Plotinus*, Cambridge, 1996; E.K.Emilsson, *Plotinus*, Routledge, New York, 2017 その他を参照した。

4. 研究成果

(1)『エンネアデス』第1論文「美について」において、「形」が知性的なレベルから感性的なレベルに介入してくる動きの記述を分析して、この活動性が、知性的なものと感性的なものとの間の分有関係の基礎づけに関係していることについて考察し、さらに、魂の浄化が感覚で捉えられた形を知性で捉えられる形に適合させることに寄与している点を明確化すべく解釈を試みた。その成果をイタリアのシラクサで開催された「美」をテーマとする国際学会において発表した。この成果を論文にまとめて公刊した。

(2)プロティノスにおける哲学的営みに組み込まれている感覚の機能に関して、肉体性や情動に結びつく受動面と、知性的働きに発展していく動態面とを区別し、かつそれらの関係性を説いている箇所に着目し、とりわけ痕跡や印影などが、知性で捉えられる存在の想起や観照へと連動させていく役割を果たしていることを明確にすることに努めた。この考察を、フランスのエクスマルセイユ大学で発表した。

(3)日本の「型」概念との違いを意識した上で、型が魂に刻印される働きについてのプラトン『国家』における議論と、印影と痕跡の概念にかかわるプロティノス『エンネアデス』における議論とを比較検討し、これらの概念がどのように感覚で捉えられるもののレベルから知性で捉えられるもののレベルへの連携を可能にさせているかについて考察した。イタリアのパレルモで開催されたオンラインによる国際学会において発表し、この成果を論文にまとめて公刊した。

(4)第1論文「美について」において徳と美の関係が痕跡の概念と関連づけて展開されていることから、第19論文「徳について」における徳の議論の中の痕跡や印影の概念に着目し、第53論文「生命あるものとは何か、人間とは何か」における印影の概念とも比較しつつ、テキスト解釈を遂行した。痕跡が徳の範型と呼ばれるものに人間の魂を接近させていく役割を果たしていることを示した。痕跡の機能の考察を通じて、徳と美がプロティノスにおいて緊密に関係していることを確認できた。その成果をイタリアのシラクサで開催されたギリシア世界の「徳」をテーマとする国際学会においてオンラインにて発表し、さらに論文にまとめて公刊した。

(5)知性で捉えられるものと感性で捉えられるものとの関係づける「分有」の問題について、とりわけプラトン『パイドン』のテキスト解釈をもとに考察し、さらにプラトンのこの分有概念に依拠して展開しているプロティノスの美と分有についての理論を痕跡の機能とともに検討した。プラトンおよびプロティノスの思索において知性的なものと感性的なものとの分有関係を、動態を明確にする観点から考察し、その成果を、フランスのパリで開催された国際学会において、オンラインにて発表した。

(6)第28論文「魂の諸問題について(第2篇)」において、「痕跡」が肉体の生命活動に及ぼす働きについての議論解釈を遂行し、肉体と区別される魂は変化せず非受動的であり、他方で情動が魂ではなく肉体に生じることを主張するプロティノス思想の特質を検討した。また、その基盤の上で、その他の論文分析を遂行し、肉体と区別される魂がいかにして肉体に生を与えているのかという観点から、魂が自らの痕跡を肉体に送って機能させているというプロティノス理論の独自性について考察した。その考察結果をイタリアのシラクサで開催された心身関係をテーマとする国際学会で発表した。

(7)第26論文「非物体的なるものの非受動性について」において、魂は「動」の原因ではあるが、動かされるのは肉体であることについての議論を確認した上で、肉体に生じる情動のあり方を、肉体に魂から送られた痕跡がもたらす「動き」の側面から考察し、スイスのヌーシャテルで開催された「動」をテーマとする国際学会において発表した。

(8)プロティノスにおける感覚的働きと知性的機能との関係や連動を「痕跡」や「印影」などの働きを明確化しつつ考察してきた中で、「表象」の位置づけとそれが果たしている機能についてさらに究明していく必要性が、今後の研究課題として強く意識された。引き続きプロティノス思想における感覚をめぐる理論を探究するために、この側面からさらに考察を深めていくことができると思われた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Purification and Forms of Beauty in Plotinus
3. 学会等名 The Fourth Interdisciplinary Symposium on the Heritage of Western Greece (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Forme et trace dans l'esthetique de Plotin
3. 学会等名 Centre d'etudes sur la pensee antique Kairos kai logos (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Spatialite et subjectivite dans la culture japonaise et occidentale
3. 学会等名 Interculturalita e Pluralismo (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Notions of Impression and Trace in Plotinus' Treatise On Virtues
3. 学会等名 The Sixth Interdisciplinary Symposium on the Heritage of Western Greece (with special emphasis on arete: virtue, excellence, goodness) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Participation platonicienne : intervention dynamique de la forme ?
3. 学会等名 38e congres de l'ASPLF : La participation, De l'ontologie aux reseaux sociaux (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Impassive Soul and Animation of the Body in Plotinus
3. 学会等名 The Eighth Interdisciplinary Symposium on the Hellenic Heritage of Sicily and Southern Italy, "Soma kai Psyche -Mind and body" (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Makoto Sekimura
2. 発表標題 Mouvement et affections dans la relation du corps et de l'ame chez Plotin
3. 学会等名 39e Congres de l'ASPLF : Le mouvement (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Heather L. Reid and Tony Leyh	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Parnassos Press	5. 総ページ数 292
3. 書名 Looking at Beauty to Kalon in Western Greece (Selected Essays from the 2018 Symposium on the Heritage of Western Greece) (Makoto Sekimura, "Purification and Forms of Beauty in Plotinus," 247-254)	

1. 著者名 Caterina Genna	4. 発行年 2020年
2. 出版社 FrancoAngeli	5. 総ページ数 392
3. 書名 Interculturalita e Pluralismo (Makoto Sekimura, "Spatialite et subjectivite dans la culture japonaise et occidentale," 311-321)	

1. 著者名 Heather L. Reid and John Serrati	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Parnassos Press	5. 総ページ数 350
3. 書名 Ageless Arete (Selected Essays from the 6th Interdisciplinary Symposium on the Hellenic Heritage of Sicily and Southern Italy) (Makoto Sekimura, "Virtues and Assimilation to God in Plotinus," 315-330)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------